

# おやつのかん3 -ちょっとひとやすみ-

—わかりやすい伝え方って?—

NO. 16



急に空が秋色になって、少しだけ空気がひんやりとしてきて、ちょっとフットワークが軽くなるこの時期、何を書こうか、あれもこれもといろいろ考えてしまいます。そういう時は、基本に立ち返るといいのかなど。今回は、“ことばの育ち”について触れていこうと思います。

まずは、就学前の子ども達、まさにいろいろな経験を通じて、わかること、わかることばを増やし始めたばかりの時期です。あんずの朝の身支度で、コップとタオルを洗面所にある自分のフックに掛けに行くお仕事があります。カバンの中からコップの入った巾着袋と、タオルを取り出します。「コップとタオルをかけてきてね」と言われ、その場に向かいます。毎日繰り返していくうちに、少しずつ習慣になっていきます。さてこの行動、「コップとタオルをかけてきてね」という声かけの意味が解ってきているのか、“この時間にそのグッズを見ればそこに持っていく”という行動が身に付いてきたのか、どちらだと思いますか？

多くの子どもが、行動が身に付くのが先行し、声かけはそこに添えられたものとして後から解ってきます。つまり『状況の理解』ができるようになると、そこでの言葉かけがわかりやすく入っていくというわけです。ことばの理解が曖昧なうちは、もしかすると、コップとタオルを持たせて、「スプーンとフォークを置いてきてね」という声かけでも、洗面所のフックに掛けに行くかもしれません。まだ、声かけだけではわからないのです。と同時に、他の場面でも、食事の時間や歯磨きの時間に、「コップを持ってきてね」「タオルで手を拭こうね」など、そのグッズにまつわる声かけが飛び交います。そんな日常の繰り返しの中で、ひとつひとつの言葉を理解していきます。余裕のある時には、そんな一場面一場面を大切にしたいですね。少しわかってきたら、見せてから声をかけたり、声をかけてから見せたり、ちょっとした揺さぶりが、子どもの気付きを引き出します。

どの子にも有意義な丁寧な関わり方のスタートは、わかりやすい状況の中での具体的な言葉かけと指差しやジェスチャーです。わからないときは、私たち大人だって同じですよ。

放デイに通ってくる学齢の子達になると、またひと味違います。ことばの理解や発語に個人差はありますが、経験は豊富です。興味関心の幅も広がり、自分の嗜好もはっきりしてきているので、簡単なやりとりだとしても、その子の思いを年齢相応にリスペクトする姿勢は、より求められます。身に付いていることも多いですが、求められることも多いので、上手くいかないことも少なくありません。説明されてもその通りにできない場面、注意されてもまたやってしまう子、苦手が先行して話を聞こうとしない姿など、いろんな場面があります。じつは多くの子が、そこでどうすればよいか、わからず困っています。そんな時、そばにいる者はどう関わっていけばよいか…。

ことばで指示したり、注意したりするよりも、やっぱり一緒にやっていく、手伝っていくことが大切だと思います。“こうすれば大丈夫”“こうなるんだよ”と成功体験でしっかり終わることで、次に声をかけられたときの、そのことばの響きは、少しずつ心地よいものになっていくはずですよ。

丁寧な対応は、甘やかしてではありません。関わりは、厳しいか優しいかの二択ではありません。“その子が理解しやすく、やる気になるように”という視点が原点です。

最近好きな言葉です。「がんばるよりも、はりきってほしい！」(H29. 9) K

